土器川の貝類

土器川流域ではこれまで24種の淡水産貝類が確認されており、そのうちの21種が在来種である。河口では32種の汽水産・海産貝類が確認されている。上流域周辺の森林には、多様なカタツムリの仲間（陸貝）が生息し、保全上の重要な地域となっている。

土器川水域の棲み心地は？

淡水産貝類は海で誕生・進化し、川や池に進出してきた生き物だ。同じような道を歩む淡水魚と異なり、これら貝類は適応進化の歩みが遅いために、流れのある水域に進出した種はカワニナとホラアナミジンニナの2種だけで、残りの22種は土器川とつながる流れの緩やかな用水路や周辺の池、ため池などを主な生息環境としている（図1を参照）。それは、香川県の土器川を含めた各河川は、急流で短い。上流において瀬切れを起こすことがあるため、下流における砂泥の堆積量が少なく、たとえ堆積してもすぐに感潮域に入ってしまうからである。淡水二枚貝のマツカサガイとカタハガイは、砂泥が大量に堆積している環境を好むため土器川流域では主に用水路に生息しているのに対して、流れが緩やかで砂泥が大量に堆積している対岸の岡山県の旭川高梁川、吉井川などには、本流の下流域にも生息している。また、香川県では主にため池に生息するドブガイさえも、岡山県では各河川の下流に多数の個体が生息することを考え合わせると、淡水産貝類にとって、土器川に代表される県下の各河川は棲みにくい環境のようだ。

【図1】土器川流域における淡水産貝類の主な生活環境

ため池	11種（オオタニシ、ドブガイ、ドブシジミ等）
水　田	6種（マルタニシ、サカマキガイ、ヒメモノアラガイ等）
用水路	5種（ヒメタニシ、マツカサガイ、カタハガイ等）
河　川	2種（カワニナ、ホラアナミジンニナ）

マルタニシ

分布：日本（北海道～九州）、朝鮮半島

殻高	殻径
60mm	50mm

土器川下流域（丸亀平野）の水田やため池に生息する。

カタハガイ

分布：日本固有種（本州～九州）

殻高	殻長
40mm	70mm

香川県では土器川中流域の用水路にのみ生息する。

ホラアナミジンニナ

分布：日本固有種（紀伊半島～四国、九州北部）

殻高	殻径
1.5mm	1mm

流れの緩やかな源流部の礫の底面や側面に生息する。

土器川の魚類

土器川では、これまでに純淡水魚34種、通し回遊魚17種、周縁性淡水魚（汽水域でみられる魚類の総称）50種の合計101種の淡水魚が確認されている。

流域や環境が生み出す多様性

土器川は、讃岐山脈の竜王山（標高1059.1m）を源とし、瀬戸内海へ注ぐ件名度郡まんのう町と丸亀市内の河川だ。水源から河口までの距離が33.1kmの川で、県内の魚類の生物多様性が最も高い場所の一つとなっている。淡水域では源流部にのみ生息する種から、下流域に限定的に生息する種に至るまで、種によって棲み分けがあり、このことが多様性を生み出している（表1を参照）。源流の種数は少ないが、自然度の高い特徴的な在来種のみが生息する。下流に向かうにつれて魚種が増えていき、外来種も増える傾向にある。注目すべきは下流部に多く存在する出水（でいす：湧き水を主に農業用水として用いる取水施設）で、そこはアブラボテやイトモロコ、ヌマムツなど希少種の最後の楽園とも言うべき場所となっている。ちなみに、淡水魚を地球全体で見ると、地球上に存在する水のうち、陸上に存在するのは0.01%に満たないにもかかわらず全魚類の約43%の種（約1万2000種）が陸上に存在する水の中に生息している。この著しい多様性が生じた理由としては、①平均的水深が海より浅いため、植物プランクトンや水草などが繁殖しやすく、これらが淡水生物の命を支えていること、②棲んでいる川や湖から、別の水域に自力で移動できないため、それぞれの地域で別の種に進化していくやすいことが挙げられている。

【表1】土器川の魚類の生息パターンと流域ごとの生息種数

| 生息パターン | | |